

## レモンのおもちゃ

十六歳の丈光は、ベッド脇にある小さな椅子に座り、壁を見つめていた。そうしないと涙がこぼれそうだった。

病院の白い壁は、まるで巨大なキャンパスのようで、室内に存在するあらゆる感情を吸い込んでいくようだった。

母はベッドの上で、浅い呼吸を繰り返していた。点滴が透明な液体を静かに送り込み、それが彼女の枯れかけた身体の中を巡っていく。

「あんたこんな時まで静かね」

かすれた声が、静寂を切り裂いた。まるで糸が切れかかった古いオルゴールから聞こえてくる音色のようだった。

母は最期の力を振り絞って、丈光を見つめていた。

丈光は、ただ黙ってその視線を受け止めていた。言葉を発しようとするれば、喉の奥に何かが詰まって、声にならない嗚咽が漏れてしまうような気がした。

三時間後、母の呼吸は止まった。

丈光は母の冷たくなった手を握りしめながら、静かに涙を流した。

葬儀は、簡素なものだった。

親戚も少なく、参列者はまばらだった。母の遺影は、スマートフォンで撮影した写真を引き伸ばしたもので、笑顔でピースサインをしていた。

葬儀の後、丈光は祖父の家に引き取られた。祖父が居間で整理していた書類の中に、一枚の戸籍謄本を見つけた。

「僕もあまり見ないんだけどな、そういうの」祖父は微笑みながら、丈光に告げた。

丈光は戸籍謄本を手にして、テーブルの脇に腰かけた。丈光や母の生年月日が淡々と綴られていた。こういった行政的な書類を目にするのは、高校生の丈光にとってははじめてだった。そして、丈光の欄に見慣れない男の名前が記されていることに気づいた。

「おじいちゃん、この人だれ？」

丈光は、戸籍謄本を祖父に差し出した。

祖父は視線を落としたまま、小さな声で言った。

「……お前の父親だ」

「父親？」

初めて耳にする言葉に、丈光は戸惑いを隠せなかった。祖父は、深くため息をついた。

「さあ。葬式にも顔を出さなかったんだ。……碌な奴じゃないだろう」

「会ったことないの」

「ない。会いたくもない」

そう呟くと、祖父は何も語ろうとはしなかった。

母の遺影を見つめながら、丈光は父という存在について考えを巡らせていた。一体なぜ、彼は自分と母を置いていったのか。そして、今どこで何をしているのか。

丈光は静かに決意した。

父に会いに行こう、と。

学校やアルバイトに休みを告げ、丈光は僅かな荷物だけを持って、家を出た。

排気ガスとアスファルトの匂いが、夏の空気に重く混ざり合う。朝から照りつける太陽が、肌をジリジリと焦がしていく。丈光は、ヘルメットの中で深呼吸をして、アクセルをゆっくりと開けた。原付バイクのエンジン音が響く。

地図アプリで調べると、父の本籍地は、山間部にある隣の県の小さな市だとわかった。見慣れた景色が、徐々に山道へと変わっていく。ガードレールの下には、深い谷底が広がっている。カーブを曲がるたびに、景色がめまぐるしく変化していく。

数時間後、丈光は目的の住所にたどり着いた。

そこは、山間の静かな集落にある、築年数の経った小さな家だった。玄関の扉は少しだけ開いていた。

エンジンを止め、ヘルメットを脱いだ。蝉の鳴き声が響き渡る。

丈光は深呼吸をしてから、玄関の扉に手をかけた。

その時、背後から、聞き覚えのない声をした。

「どちら様ですか？」

振り返ると、そこには四十代後半と思しき女性が立っていた。白いTシャツにベージュのチノパンといういでたちで、首にはタオルをかけている。

「あ、あの」

突然のことに、丈光は言葉に詰まった。女性は怪訝そうな顔をする。

「どちら様でしょうか？ ご用件は？」

「あ、えっと、南修平さんはこちらに？」

緊張で声が上ずってしまう。女性は、一瞬だけ目を見開いた後、少し困ったような表情をした。

「主人はいませんが……。あの人、あちこちふらふらしてて、いつ戻るやら」

丈光は主人という言葉に少し動揺した。つまりこの人は父親の妻になるのか。

「そ、そうですか」

女性は少し間を置いてから尋ねた。

「ご用件は何でしょうか？ 伝えましょうか？」

「いえ、あの……。俺、浅井武光っていいいます」

「はい？」

「あの、俺」

「どうしたんですか」

丈光は逡巡した。ちらっとバイクを見つめた。

ここまで来たのだ。ここで帰っても後悔するだけだ。

「修平さんの息子らしくて」

女性ははっとした顔をしてから、少し微笑んだ。

「……どうぞ、上がってください。お茶でも入れますから」

促されるままに、丈光は家の中に入った。玄関を入ると、すぐにリビングがあり、こじんまりとした空間が広がっている。畳の部屋には、小さなちゃぶ台とテレビが置かれていた。壁には、子供が描いたと思われる絵が飾られている。

「桜、お客さんだよ」

女性が奥の部屋に向かって声をかけた。すると、小さな女の子が、恥ずかしそうに顔をのぞかせた。

「あれは娘の桜です。私は、南愛子っていいます」

愛子は、にこやかに自己紹介をした。

桜は丈光をじっと見つめている。その視線は、好奇心と警戒心が入り混じった、複雑なものだった。

ふたりは和室で座って向き合った。丈光がしどろもどろに事情を説明すると、愛子は大きく頷いた。

「それじゃ、丈光君は修平に会いに来たんだ」

「はい」

愛子は溜息を吐いた。

「ここで待ってる？」

「えーと」

「泊る所もないでしょう、あの人、いつ戻るかはわからないけど」

愛子の計らいで、丈光は南家に泊まることになった。

修平の帰りを待つ間、丈光は桜と遊んだり、愛子と家事を手伝ったりしながら、穏やかな時間を過ごした。祖父から電話があったが、友人とちょっと出かけていて、と告げると、気をつけるよ、とだけ返事があった。

夕食は、愛子の手料理だった。桜は丈光に好きな食べ物をたくさん勧めてきた。愛子はそんな桜を優しく見守りながら、時折、丈光に修平の話をした。

「あの人は、昔から変わり者で……」愛子は、少し寂しそうに笑った。「若いころは突発的に行動しちゃうところがあったみたいで」

愛子の言葉は、丈光の心に複雑な感情を呼び起こした。これが、自分の父親に対する、初

めて聞く他人の評価だった。

丈光は直感した。愛子は何かを知っているが、口には出していない、と。

ただ丈光もそれを問い詰めることはできなかった。

重大な事実がある場合、それは修平から聞くべきことだ。

夕食後、薄暗くなったリビングで、丈光は桜と向かい合って座っていた。ちゃぶ台の上には、桜のお気に入りのプラスチック製のおまごどセットが広げられている。ピンクや黄色のカラフルな食器や、おもちゃの野菜、美味しそうな料理の模型が並べられ、小さな世界を作り出している。

桜は、赤いバンダナを頭に巻いて、すっかりシェフになりきっている。

「おにいちゃん、ハンバーグ、だいすき？」

桜は、キラキラとした目で丈光を見つめながら、小さな手でハンバーグの模型を差し出した。その手つきは、どこかぎこちないながらも、一生懸命なものだった。

「うん、大好きだよ」

丈光は、桜に合わせて、少しオーバーにリアクションを試みる。すると、桜は、くしゃっと顔をくしゃくしゃにして笑った。

桜は、ハンバーグの模型をさらに近づけてくる。

「はい、どうぞ！」

「いただきます」

丈光は、おもちゃのフォークを使って、ハンバーグを口に運ぶ真似をする。

「おいしい？」

桜は、目を輝かせながら尋ねてくる。

「うん、とっても美味しいよ」

丈光は笑顔で答えた。

桜は、満足そうに頷くと、違うお皿を出していた。

「じゃあ、つぎは、サラダね！」

「ありがとう」

サラダとして出された皿には、プラスチックでできたおもちゃのレモンが載っていた。

丈光が食べようとする、桜は何かを思い出したのか、台所のほうへかけていった。

残された丈光は、レモンのおもちゃを手を取った。

とても軽い。丈光はゆっくりとそれを握りつぶした。

簡単にへこんだが、空気が入るとすぐに戻った。

つまらないおもちゃだと思った。

二日目の夕方、修平が帰宅した。玄関のドアが開く音がした時、丈光は緊張で体が硬直するのを感じた。

「ただいま」

修平は、疲れた様子でリビングに入ってきた。汚れた作業着を着ていた。現場作業からの帰りだろうか。そして、ソファーに座っている丈光の姿を見つけると、目を丸くした。

「どなたです。愛子のお友達にしてはでかいな」

緊張感がない様子の修平は、愛子に尋ねた。

薄く笑顔を浮かべた愛子は静かに修平に近づくと、低い声で言った。

「丈光くんよ。浅井明子さんの息子さんですって」

沈黙がリビングを包んだ。

丈光は立ち上がった。

「南修平さん、ですよ。話があります」

修平は、一瞬だけ険しい表情を見せたが、すぐに諦めたようにため息をついた。

「外で話すか」

修平はそう言うと、丈光を近くの河川敷に呼び出した。夕暮れの河川敷は、人影もまばらで、静寂に包まれていた。オレンジ色に染まった空の下、修平は煙草に火をつけた。

「で、なんだ。俺に何の用だ？」

修平は、煙草の煙を吐き出しながら、面倒くさそうに言った。丈光は、修平の瞳をじっと見つめた。

「あなたは、僕の父親ですか？」

修平は、一瞬だけ目を大きく見開いた。しかし、すぐにいつもの無表情に戻ると、吐き捨てるように言った。

「金をもらったんだ」

「どういう意味です」

「二万円。お前のお母さんに頼まれて、戸籍に名前をのっただけだ。若いから、何も考えていなかったんだよな。悪いな。ついでにだが、お前の本当のお父さんも知らん」

風船のように膨らんで、張りつめた心から一気に空気が抜けていくような感覚があった。言葉が出ない。

怒りや悲しみ、虚無感などの様々な感情が、丈光の心をぐちゃぐちゃにかき混ぜていく。

沈黙が、二人の間に重くのしかかる。川のせせらぎだけが、現実の音として耳に届く。修平は、新しい煙草に火をつけようと、ポケットを探っていた。

丈光は言葉を探した。自分がやりたいことを考えた。

口に出すべき言葉を探した。

「殴らせてください」

やっと出た言葉だった。

煙草を吸いかけていた修平がゆっくり顔を上げた。

修平は煙草を吸わずに、ポケットに戻した。顔には困惑の色がにじみ出ている。

「なんですよ」

「ほ、ほんとの親父の代わりに」

修平は小さくため息を吐いてから、覚悟を決めたのか、頭を横に振った。

「わかった。二万円分だ。お前がここにいるのも俺のせいだ。いいよ」

丈光は拳を握る。

思い切り振りかぶって、修平の頬をめがけて拳を落とす。

速度は十分だったが、ペチンという情けない音がした。

それでも修平はよろめいて、右ひざを曲げた。

「ってえな、クソガキ」

修平は唾を吐いた。血が混じっていた。

丈光は肩で呼吸していた。血が逆流するような感覚があった。拳は震えていた。

生ぬるい風がひゅうっと二人の間を抜けていった。

修平は立ち上がって、踵を返す。

「帰るぞ」

目を見開いている丈光は、修平の後ろに続いた。

南家に戻ると、愛子がリビングで心配そうに待っていた。

二人の顔を交互に眺め、「食事、準備するね」と呟いた。

修平はむつかしい顔をしたまま、「風呂入ってくるよ」と浴室へ向かった。

丈光がぼつんと立っていると、後ろで手を組んでいる愛子がすたすたと歩いて近づいてきた。

愛子は少しこわばった顔をしていた。

「どうしたの？」

「なんでもないよ」無理やり笑顔を作った。

「元気出して」

愛子は後ろで組んでいた腕を解き、掌を広げてきた。小さな掌に、プラスチック製の黄色いレモンのおもちゃがのっていた。

「これは」

「サラダ。これ食べて。おにいちゃん、どうぞ！」

桜は、満面の笑みを浮かべて、丈光にレモンのおもちゃを差し出した。

丈光は手のひらを開くと、桜はそれを上に載せた。

ひんやりとしたプラスチックの感触が、手のひらに伝わってくる。信じられないほど軽かった。掌に溜まっていた熱がすべて奪われていくようだった。

全身から、行き場のなかった怒りがすーっと体から抜けていった。

桜はまだ悲しい顔をしている。

「……ありがとう」

やっと言葉を口にすると、丈光の目頭が熱くなってきた。

「大丈夫なの？」桜はまだ心配そうな顔をしていた。

「うん大丈夫大丈夫」

丈光は涙をこらえ、笑顔を作り、レモンのおもちゃを見つめた。

しっかり見つめないといけないと思った。目に焼き付けないといけないと。

それは優しさの形だったからだ。